

解像度は"1600×1200"

doujin circle

とらや

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

イラスト
(CG)
+
ノベル

この素晴らしい状況に感謝を！2

KONO SUBARASHII JYOUKYOU NI KANSYA WO!

第2弾
魔法少女と
クルセイダーの
2本立て!!

——あらすじ

数ヶ月前。

カズマはめぐみんとの日課（爆裂魔法）の後に性関係を持つようになる。その関係は現在も続いており、ほぼ毎日行われていた。

「くそっ。今日は日課に行けなかったな……
最近の楽しみだったのに……」

「あ!?! かつかずマジじゃないですか」



「おっめぐみん。今日は日課を手伝えなくて悪かったな」

「ダクネスに付き合っ
て貰ったので
大丈夫です」

「そうかそうか。

けど、もう一つの日課はどうしたの？」



「う、うるさいです!!

今日は疲れたので風呂に入っ
てきます」

「明日は手伝って下さいよ……」

そう言うともめでみんは
そそくさと行ってしまったー

(風呂か……)

(今日はめぐみんを抱いてないし
俺も風呂場へ突入するかも?)

(いやけど屋敷内でやるのは……)

——などと考えているといつの間にか
脱衣所の前に立っていた



(心は正直だ。これは突入するしかない)

「……んっ……ふう……っ……ああ……」

(ん？何か聞こえるな……)



「ん、んっ……ふう……っあ……はあ」

脱衣所の中から押し殺してはいるが微かにかす
喘あえぎ声が漏れて聞こえてくる——

「あ、はあ…あ、ん…ん、もづっ…」

(まじか。オナってるし……)

「んっ…ん、そっ、んっ…ん…だめ」

「……っ…う…あ……」

めぐみんはくちゅくちゅと音を立てながら
オナニーをしていた——

「っ、んっ……はあっ……だめ……え！」

——どんどん激しくなる指使いで
おまんこはぐしよぐしよに濡れていた

「っん……ク……ク……きも……ちいっ……」

(指を挿れながらクリトリスも弄いじってるのか)

「んん……だめえ……クリは……弱い……んっ……です」

「ぞっ……はあっ……も……止まんない……どお」

膣内なかを弄いじるたびにぐちゅぐちゅと
卑猥ひわいな音が大きくなっていく——

「……ッはあ……はあ……はっ……はっ……」

（女のオナニーを見たのは初めてだな……
こんなの見せられたら我慢出来ない）

カズマは突入を決意し脱衣所の扉を開けた——



ガキヤ。

「ぎゃああああああああああ!!」

「馬鹿! 声がでかい!!」

慌てて扉を閉め、めぐみんの口を塞ぐ

「あっあ…の…いつから見えました?」

「最初の方からずっと見てたよ」



「わ、わかってはいましたけど……」

「っつそり覗^{のぞ}くなんて変態ですね」

「まさか脱衣所でオナニーしてるなんて
思いもしなかったよ」

「う、うるさいです！」

「全部カズマが悪いんです……」

めぐみんはこれまでに見た事がないくらい
動揺しており恥ずかしさから赤面していた

「今日はやってなかったもんな。俺が悪かった」

「そう言うとかズマはスポコを脱ぎだした——」

「なっ…な、何をしてってるんですがああ!?!」

「何って………?何時もやっってる事じゃない!」

オナニーを覗のぞかれて動揺している
めぐみんを押さえつけ、ちんぽを押し付ける

「わ…私に「ナン」で舐めろというんですか?」

「その通り。今日の日課も終わらせないと
発育勝負に負けるぞ?」

カズマはまだ少し抵抗のあるめぐみんの
口に無理やりちんぽをいれて
フェラチオを開始する——

「よし。今のまま口の中に射精すぞ」

「んん…っん…んん」

めぐみんは少し嫌がるように顔を振るが
カズマはお構いなしに腰を動かす――

「んっ…んぐっ…んふん…んん」

「ん…ちよ…カズマさん…ん…んで
待って…んふ…ください…」



我慢してくれ。もうすぐ射精^でるから

そう言う^と激しく腰を前後させる

んふ…は、はげしい…ん…ん…ん…ん

んじ…ん…ん…ん…ん…ん…ん…ん

んっ…んっ…ん…ん…ん…ん…ん…ん…ん…ん…ん



「んん…どうごせなうでぢが…」

「…口の中は嫌だっつうてっめらじ…」

「胸っ胸っ。ハのまま一緒に風呂に入るか」

「うう…仕方ありません…わかりました…」



一緒に風呂に入るとカズマはめぐみんの
肩に腕を回し囁く——

「屋敷でやるのは初めてだな」

「あ、当たり前じゃないですか…アクアさんと
ダクネスさんにばれたらどうするんですが…」

「まあな。けど風呂場なら大丈夫だろ」



恥ずかしさから固まっ
ているめぐみんのお
っぱいを揉みながら話
を続ける――

「それにばれてもあの二人なら大丈夫だって」

「そ、そうかももしれませんが……」

「それにこのままじゃ終われないよね？」

「…挿れる前につエうで勃たせておめ」

めぐみんを座らせると夕オルを取り
顔の前にちんぽを差し出す――

「んんっ……また舐めてほしいんですけど……
しょうがないですね……」

少し抵抗はあるが嫌がる様子もなく命令に
従うめぐみん

「ふうん、ううん…んっ」

カズマのちんぽを右手で握ると舌で竿の部分を舐め上げフェラチオを開始する

「んっ…随分上手くなったな…」

「んっ…んっ…んっ…んっ…んっ」

手で軽くシゴかれながら舐められる事で気づくとカズマのちんぽは勃起しており先走りの汁が少し出ていた――

「もう、大きくなっできましたね…」

「んじゅっ……ん……んじゅっ……んっ……んんん」

めぐみんは不意打ちとばかりに
勃起したちんぽを口の奥まで^{くちくち}咥えこむ

「んんっ……驚きましたっ……気持ちいっ……んじゅっ……んんん」

そんな台詞^{いごせ}を言っているかのような
上目遣いでこちらを見ながら口の中では
舌を動かしてくる

(いつもより積極的だな。)

オナニーを覗かれて発情しちゃったかな…)

「んん…っん…んん」

「んっ…ん…ん…ん…ん…ん…ん…ん」

普段より激しいフェラチオの刺激で

カズマのちんぽはさらに硬くなっ

「んっ……しちゅゅ……んっ……んむ……ん」

「…ぬっおん気持ちっ…ぬっ」

「んっ……んっ……んっ……んっ……ん」

口の中はとて暖かく、舌が深く突っ込んでくっつく

「んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……んっ……ん」

言われたとおり、手につきお尻をこちらに
突き出すとおまんこはもうぐしょぐしょに
濡れていた——

「もう、十分濡れてるな」

「そ、そんなこと言わなくってさっさと」

「これを挿入ちんぽれてほしかったんだろ?」

ちんぽを入り口に擦こって愛撫あいぶする

「そういう身体にしたのはカズマじゃないですが」

何度か擦るとお尻を動かしてめぐみんも
求めてくる

(めぐみんもエロくなったもんだ……)

「よし、挿入ちんぽれるぞ」

合図とともにここにバックから一気に貫く——

「ああっ……いっ……っ……っ——」

「ひゃあああ……ん……ああっ」

(挿入れた途端、締まったな……)

「んああっ……かた……いっ……ら……っ——」



「あっ……あっ……あっ……そっだめ……っぴゅ」

(めいおんは、ソックスを突かれるの弱いんだよな)

「ぞっ……あ……そっダメえ……そっげばかり……突くなあ」

(少しづつ慣れてやるが……)

「ひあっーだ……から……やああああっ……
そっげばかり……擦る……な……あ」



「いざあああーそんな敏感だから……
だめええ……もう……イキ……そう……どお」

(とりあえず一回目……)

めぐみんの弱点を激しく執拗に刺激すると
膣内がキュと締まる

「ああっ！あッあああああっ！！」

「い、イクっ……も、もうだめだ……おっ！！」

(あ、おぐにを刺さるからっ……)

「ちよ、ちよっとカズマさん!?!」

片足を持ち上げるとヤンらに激しく腰を振る

「だめええ…!!ま、待ってくださいヤン!」

(この角度やばいな…これならいけそうだ)

「んっやあ…あっあっあっあっ…あ」

「あっ!!んっま、まだ…まだで…すが?」

「ん…ダメ…ダメ…そ、うダメ…ど…お」

(ん?またイキそうなの?)

「んっあっ、ああっ……」

「っあっあっ、あっ、ああっ……」

どんどん激しくなるピストンで愛液が溢れ
めぐみんは自分から腰を振りだす――

(っん!!こんな気持ちいいの始めてだな...)

「んん...ぢあっ!!奥...ぢお...っどお」

「はあやあ...なか腔内なかが擦れてえ...あっああ...」

(自分から腰振っちゃって...俺もうストスパート)

「ぢあん...す...おっ...っんあああ」

「あぁっ……っ……あっ……あっ……あぁぁぁぁぁっ！」

「か……かズマ……おがしく……な……る……んんっ」

「そろそろイクからな」

「んっ……あ……は……い……また……んんっ……」

「っ……ちやう……あッ……あッ……あぁぁぁぁぁッ」

「んん……ふう……ふう……っ……」

(結局何回イッたのやら……めぐみんの今日の
乱れ方はすごかったな)

そのままちんぽを抜くと同時にめぐみんの
身体力は抜け、ぐたっとなんと倒れた——

(ああ……また気を失っちゃったが……)

(けど……まだやり足りないな)

とりあえず倒れたためぐみんをそっと持ち上げると
服を取り部屋に運ぶことにした——


(このまま寝ているめぐみんをもう一度…
とこのもあれだしな……)

(あっ!!そういえば今朝バニルに頼んでおいた
新商品が届いたんだっ)

(あの商品…試したいな…)

(となると…ダクネスしかいない)

意を決したカズマはめぐみんを部屋に運ぶと
商品を握りしめダクネスの部屋に押しかける――



フハハハハハツ!!
これは最高の一品である!!
この傑作を是非試してほしい!!

「ダクネス!!ちよつと時間いいか!!」

「ん?こんな時間にどうしたカズマ?」



「もしかして……」

「ついに夜這いよほいをする気になつたのか?」

「ふふふふ……」

「その通りだっ！ドレイ・タッチー！」

「んぎゃああっ！！」

カズマまあお前…気でも狂ったかあ！？」

「んんん…何を言ってるんだ？お前はずっと
これ待ち望んでいたんだろ？」

「だから…んんん…いう事ではないと…言ってるだろ。
それに力で私に勝てるだけでもん…」

「って…なんだこれは…？ち、力が出ない!？」

「ふはははは。実はこの時のために
ドレイ・タッチのレベルを上げたからな」

「ふうう…さすがだ…」

「やはりお前は本物の変態のようだ…」

ドレイニタッチで体力を奪われたダクネスは
ドサツと床に崩れ落ちた――

「そ、それで一体私に何をするつもりなんだ……？」

「実はバニルに頼んでおいた商品が届いてな……」

「商品……？ 一体それはなんなのだ……
も、もしかして……ふひっ」

（……いつ実はいつもの如く喜んでるな。
まあ、いいか……とりあえず服が邪魔だ……）

「ステイール!!」

「なあああああアツツ!!」

「な、なあカズマ…」

「や、やはりこういう事はマズインじゃないか?」

「何をいまさら……本当はずっと待ってたくせ!。それに抵抗できないただろ?」

「ステイル!ステイル!!」

「ダクネスお前…凄くやらしい下着つけてるな」

「う、うるさいっ!! お前もしかして
またサキユバスに操られてるんじゃないのか?」

「うん、そうだね。操られてるから仕方ないね」

「いやっ。お、お前正気だな!! ってカズマ。
その手に持つてるものはなんだ!？」



「これがバニルに頼んでおいた大ヒット
間違いなしの一品“バイブ”だ」

「お前その形はもしかして……」

「この世界は電池がないからな。」

魔力で動くようにしてもらったんだぞ」

「お前が何を言ってるのが理解出来ないがまさか
それを挿入れるつもりなのか……?」

「察しがいいな。お前が想像も出来なかった
ものだろお?」

「うーんっ=」

「んっおっ！！！」

「んっいやあああっ！！！」

「はあはあ……こんな太くて硬くて大きいのを
いきなり挿入れるなんて……」

「これをズブズブすると気持ちいいだろうっ……」

「ひゃあああ……んっんん……やあ……
バッこれ……は……しゅ……しゅ……」

「そしてスイッチオンと」

グツ……グツグツ……

「うひゃああああああんっ!!」

グツグツ……グツグツ……グツグツ……

「ひゃあはあ……ねっ……ねえ……んはあ……
なに……これえ……」

「完璧な出来だ。これなら大量生産いけるな」



「あぁっん……しっ……ぶっ!!」

グツ……グツ……グツ……グツ……グツ……

「ぐっ……ん、こんな格好で……こんな道具で
私はイッてしまう……のか……
そ、それも悪くはないが……そろそろ……」

「やっぱりお前、楽しんでるだろ?」

「はぁんっ……ち、違う……それに……も、もう
十分試しただろ?と、止めてくれないか?」

「な、何でお前は胸を揉んでるんだ？
早くバイブを止めてくれ…」

グツ…グツ…グツ…グツ…

「それにしても、けしからんおっぱいだ」

「んんっ…商品を試すだけじゃないのか…

んやあ…お前…本気なのか…」

「はあああああっ!!

もういいだろう…や、やめてくれ」

「なんだタクネス。お前イッてるのか？」

けどお前が何回イッても

塩齧いても止めるわけないだろうっ」

「いっしょにっ……えっすがカズマ……酷ちゅっNo」

グツ……グツ……グツ……グツ……

「いっしょにっ……ぞっつと前からっのっおっぢゅっぢゅ
弄り倒したかったんだ」

「はあっしゅっ!!やめろおお!!」

バイブで勃起したダクネスの乳首を
舐めまわしながら
カズマはおっぱいを好き放題に弄り回す——

「んんっ……下も上も攻められて……
だめえ……しゅわ……しゅわ……ぎゅわ……」

ぐっ……ぐっ……ぐっ……

「んああっ!!も、もうさすがに駄目だ……
下も上も敏感になって……る……る……」

ダクネスの身体がビクンビクンと痙攣しだすが
カズマは一向にやめる様子はない

「お、お願いだカズマ……も、もう簡便してくれ」

「ん、仕方ないな」

グツ……グツ……グツ……グツ……

「お、おい……早く止めて……抜いてくれ」

口では止める素振りをするがびくんと
跳ねる身体を見ながら愛撫を続ける――

「いやあああ!! き、貴様いい加減に……」

「わかった。わかったよ。」

それじゃバイブは抜いて俺のを挿入れてやる」



「はあ!? お、お前…正気なのか…?」

「俺は今サキユバスに操られてる設定だから」

「ど、どっちでもいいから…」

「これ以上はさすがにマズイだろう!!」

「この前は俺の子供がどっとか言ってたのに本番になったら怖じ気づくのかな?」

「あ、当たり前だろ!!」

「まあもう遅い!俺の方が我慢の限界だ!!」

「うひひひひひひひひひひ！！」

「はあっん…ほ、本当に挿入れるなんて……」

「んん…挿入れられた感想はどうだ？
想像と違っただろ？」

カズマはパンパンとダクネスの弱点を
探るように腰を振り続ける――

「んっ…はああああ…んっんっんっ」

「なんだ？返答もできないうらぶ感じしてるの？」

「うーん……NOじゃ……」

「ん……やっ……お、お前……こんな事して責任……
と、とってこれりゃのか……」

「ん……もちろん。これから毎日俺が
イミメてるから、故にっ……んん」

「毎、毎日、毎日、毎日……事するっも……っ……
なごよか……やあ……ん……」

「ああっ。どんどん激しいプレイにしていくからな。
期待しとけよ」

「ん…やあ…どんどん…激し…く…」

「くはああああ…こんな、想像以上の…
快楽を…毎日…」

「んじゅうっ…あッあッあアアッ!!」

ダクネスの身体が大きく仰け反る

「ああ、そうだ。それにお前が何回イコウが
俺が満足するまでは終わらないからな?」

「そ、しよんなあ…んやあああアアミ」

「んじゅう…私のおまんこ…どうですか…ん」

「ああ…おまんこ気持ち良い。

もうすぐイクからお前もイクよ」

「んっ…はっ…また…イキまっせ」

「おっっイケーまたイケー!!」

「イク、イツちやうっ…」

んやあああ!!またイクううう」

「だああメええええエエエツツツ!!」

「んやああっ!! な、なか腔内なかにっどん…No…」

「もう一度言うが

これから俺の命令には絶対に従うんだぞっ」

「は、はあい…カズマヤ、…ま」

（ぶっぶっぶっ……）これでめぐおんとダクネスとの
ハーレム生活の始まりだな。

あの駄女神もいづれ仲間に加えてやる……）

こうしてカズマの異世界生活は新しい展開
に突入していった——

あとがき

お買い上げありがとうございます。どうぞこれからも「とらや」と申します。

アニメの第2期も終わってしまいました。最後まで楽しく拝見してありがとうございました。

めぐみんオンラインで描こうと思っていましたがダクネスも大好きなので今回、2本立てにしてみました。アクア様はまた別の機会にと言う事で……。めぐみんとダクネス。カズマとアクアをまた見たいので是非第3期やってほしい!!

今回も色々な作品を参考に制作しましたが新しい発見や試みもありで次に活かせればと思っております。

次回作も宜しくお願い致します。